

A 170 小児期における給食の実態 (第7報) 学校給食各栄養素の相互関係と  
その地域比較

甲子園短大 富田絹子 西田美枝子 ○山下慶子

目的 学童期は幼児期に比して、生活習慣、食欲が安定してくるが、まだ著しい成長過程にあり、給食の持つ意義は大きい。そこで近畿I地域の公立小学校、A市45校46,825食、N市39校38,500食、S市36校36,500食の栄養素量、およびその相互関係を明らかにし、地域比較を行ったので報告する。

方法 調査対象は昭和55年度学校給食献立表で、A市187日分、N市192日分、S市181日分である。何れも栄養素10項目を三訂補食品成分表より算出、各々について年平均(X)、標準偏差(SD)、変動率(CV)などを求めた。さらに3市各々について、10項目間の相関行列を作成し、3市の比較を行った。

結果 (1) 学校給食基準栄養量との比較では、N市のCa、V、B<sub>1</sub>量が僅かに下まわったが、他の項目は何れも基準を充足している。しかし、基準量の定められていないFeが、1日所要量との関連からみて3市ともやや低い。

(2) 栄養素量について3市間の差の検定(t検定)を行ったところ、 $p < 0.01$ の有意差をもって、N市の熱量、総蛋白、動物性蛋白、総脂肪、動物性脂肪量が高く、総Ca、V、A、B<sub>1</sub>、B<sub>2</sub>量が低くなっており、A市は動物性Caが高く、Fe量が低値を示した。

(3) 各栄養素間の相関関係では、1%の有意水準を示したのは、3市とも「熱量と糖、脂肪、蛋白質、V、B<sub>1</sub>」「CaとV、B<sub>2</sub>」「蛋白質とFe、V、B<sub>2</sub>」「V、B<sub>1</sub>とB<sub>2</sub>」などであり、A市、N市では「蛋白とFe」、A市とS市では「糖とV、C」、S市では「糖とFe、V、B<sub>1</sub>、B<sub>2</sub>、C」「蛋白と脂肪」などであり、都市によりやや異った傾向を示した。